

NPOパートナーシップ協力プログラム 事業終了報告書

団体名 特定非営利活動法人富岡町3・11を語る会
代表者名 青木 淑子

1. 事業名
持続可能な伝承活動を実現するための人材育成事業～「ふくしま」の複合災害を語り継ぐ語り人(かたりべ)育成講座の新たな取り組み
2. 事業カテゴリー
夢を応援・東北NPOパートナー協働事業
3. 事業期間
2023年 12月 1日 ～ 2024年 11月 30日 (365日間)
4. 契約金額
3,500,000円
5. 担当者名
栗城 愛梨
6. 事業目的
複合災害によって奪われた「人々のつながり」を取り戻すこと、そして新たなコミュニティの再生を目的に、「課題を共有し共に歩く」地域や世代を越えた仲間づくりを行うことで、福島の実状や課題を伝える「語り人(かたりべ)」の育成に取り組む。
7. 事業の成果
 - ・地域・世代を越えるだけでなく、「言語の壁」を越える伝承活動に取り組むことができた。
 - ・「音声言語」による「語り」に、「手話」という言語の「語り」が加わった。→多様な伝承活動の可能性
 - ・障がい(特に聴覚障がい)があることで取り残されていた人たちが、手話による語りに取り組むことで、「福島の複合災害」を自分事として「知り」「考え」「伝える」仲間となった。→新たなコミュニティの広がり
 - ・聾者が聾者の言語である「手話」で震災を語ることで、自分の言葉で命を守ることができるという自信につながった。→聾者のアイデンティティを守る
 - ・他団体と連携することで、より確かな伝承活動の継続の一步が踏み出せた。
(他団体:福島県聴覚障害者協会、福島県手話問題研究会)
 - ・「手話による語り人育成講座」の開講を機に、県聴覚障害者協会と富岡町が、正式に情報保障の締結を結ぶこととなった。
8. 事業種別(コンポーネント)ごとの成果
 - (1)コンポーネント①語り人育成講座の改変
手話による語り人(かたりべ)育成教室の開講。
福島県聴覚障害者協会と連携・協力し、語り人の育成教室の企画やスケジュール、募集告知を行った。
聾者・手話通訳者へ受講の呼びかけをし、聾者11名、手話通訳者14名の申し込みがあった。
育成教室は6月から10月まで4回実施。
 - ①第1回 語り人とは
 - 6月30日(日)10:00～15:00
 - 参加者 25名
 - 内容 語り人とは(講話)／震災の語り人の話(口演)を聞く／伝えてみよう私の311(実際に体験を語る)
 - 成果
 - ・聴覚障害者へ東日本大震災について伝えることから始めることができた。
県内在住でも伝わっていないことが多くあった。
 - ・震災当時、聾話者がいかに様々な情報が不足していたかということがわかった。
聾の方を対象に、さらに伝えなければならないという思いが深まった。
 - ②第2回 バスツアー研修
 - 8月18日(日)10:00～13:30
 - 参加者 23名(通訳13名、聾者10名)

○内容

10:00～開会式

10:10～12:00バスツアー

語り人による案内で学びの森から出発し、夜の森地区や中央商店街、富岡高校、ブドウ園などを巡った。昼食会場へ移動し、昼食交流会

○成果

実際に富岡町内を回りながら現場を見て、当時の話を聞くことで、状況をしっかりと理解することができた。目でみることで、手話や身体表現をするにあたり、どのように表現したらよいか考える姿が見られた。

③第3回 表現方法を学ぶ

○9月15日(土)10:00～16:00

○参加者 24名(通訳13名、聾者11名)

○内容

聾者コース:聾者劇団の専門家によるワークショップ⇒手話表現のレベルアップ

通訳コース:表現力育成のワークショップ⇒「通訳」から「表現」を目標に研修。

○成果

音声言語だけではなく、身体表現(手話)で伝えることの難しさを学ぶと共に、音声では伝えきれないことや言語がないからこそ伝わることを学んだ。

④第4回練習と発表

○10月14日(月)10:00～15:00

○参加者20名(通訳者14名、聾者10名)

○内容

聾者コースと通訳者コースに分かれて当会所属の語り人の話を基に、発表練習を実施。

各コース合流しての発表を行った。発表の後は、互いの語りについてのアドバイスや感想を話し合った。

その後、伝承祭での発表に向けての打ち合わせをし、発表内容などを検討した。

○成果

聾者は、震災を伝えるためには、正しい情報を得て整理することが必要である事

心情的な表現だけではなく、正確な事象を伝える事の必要性を学んだ。

通訳者は、手話と音声言語の置き換えではなく、言葉に込められた「思い」を表現することの重要性に気づいた。

「手話」で表現することの課題が明確になり、取り組みの目標が定まった。

(1) コンポーネント②伝承祭の開催

○2024年11月27日(水)14:00～16:00

○参加者来場者数 約80名(高校生～一般、聴覚に障害のある方の参加があった。)

○内容

語る会所属の語り人の口演(吉田恵子、小林留美子)

聾者の手話による震災語り(吉田愛、山中沙織)

高校生の紙芝居による伝承(鈴木日陽)

すべてのプログラム、進行に手話通訳を付けた。

○成果

・広い世代、そして障害をもった方へ東日本大震災の現状を知ってもらい考える機会となった。

・想定以上の来場者があり、伝承活動そして多様な震災伝承がとても必要とされていることがわかった。

4. 事業全体を通じて得た教訓や課題等

【教訓】

1 世代を越え地域を越え、持続可能な伝承活動を目指してきたが、今回「言語の壁」を越えて、はじめてその実現が可能になることを学んだ。

2 障がい者の中でも、聴覚障がい者は音声言語での意思疎通が難しく、「コミュニケーションの成立」が課題となっているが、「手話」という言語を通して、「震災の現状と課題」「防災への取り組み」を共に伝承いく仲間であることを確信した。

3 「誰一人取り残さない防災」は、人と人の間の様々な障壁を取り除く取り組みによって実現する。

【課題】

1 聾者にとって、東日本大震災・原子力災害は、実感の湧かない遠い出来事であった。手話という言語を通して、「災害の恐怖」「原子力災害の現状と課題」の情報が正しく把握できる伝承が必要である。

2 聾者が、福島県民の一人として、「福島」の災害を県内外に伝える伝承者となるための育成と実践を継続する基盤作りが必要である。

3 「誰一人取り残さない防災」が、真にすべての人の命を守るためには、世代・地域そして言語の違いを越えて取り組まなければならない。

4 聾者と共に取り組む伝承活動が、持続可能になるための、行政を含めた組織の連携が必要となる。

5. 協力体制の構築

- 福島県聴覚障害者協会 開催の周知や運営に関する打ち合わせ、運営協力等
- 公益社団法人3.11メモリアルネットワーク（今回の事業を通じた）伝承活動についての意見交換等
- 東日本大震災・原子力災害ふくしま語り部ネットワーク会議 伝承祭の告知宣伝等